

「こうして、私たちはローマに到着した。」14

こうして私達はローマに到着した。著者ルカの熱い思いが込められた言葉です。彼は、自分の目で見、体験した事。エルサレム、ユダヤ、サマリア全土及び地の果てまでわたしの証人となるとの主の約束がどう実現したか。そして、ついに約束通り2.2千kmも離れたローマに到着した事を感動しながら書きました。パウロがどの様にローマに到着し、どの様に旅を終えたのか、みことばから学びましょう。

**I. こうして救われてから** 「こうして救われてから、私たちは、ここがマルタと呼ばれる島であることを知った。」1

こうしてとは、危機からひとりも命を失う事なく救われた事を指します。ある者は泳ぎ別の者は、板切れにつかまり無事陸に上がりました。更に救われてから人々は、マルタ島に流れ着いたことを知りました。人は救われて多くの事を知ります。私達も同じです。彼らは、救われてから神の守りがあることを知りました。◆**神の守り** 「しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。」5 パウロを通して語られた約束は、今も続いている事を知りました。マルタの人々は、非常に親切でした。ずぶ濡れで、且つ雨で凍える漂流者を火を焚きもてなしてくれました。その時、一匹のまむしが火の熱気であぶり出されパウロの腕に巻き付きました。島民は「人殺しだ」。女神の裁きだと騒ぎ始めパウロの様子を見守りました。しかし、彼が何の害も受けず、いくら待っても変わらないのを見て、「この人は神さまだ」と考えを変えました。「しかし、いくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、「この人は神さまだ。」と言いだした。」6 救われた人々は、一部始終を見て、神の守りがあることを重ねて知りました。また、彼らは救われてから◆**祈りの力**を知りました。「ポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。」8 パウロは、マルタの首長ポプリオの父が熱病と下痢で床に着いている事を知ると彼の所に行き、祈りました。そして、彼の上に手を置いて直してやりました。これを通して救われた人々は、祈りの力を知ったのです。船での祈り、また首長のための祈りも神が答えて下さるのを見たからです。この出来事を通して人々は、次々にパウロの元に病人を連れてきて直してもらいました。パウロは、囚人でありながら島民から非常な尊敬を受けました。彼が決して自分を誇らず、ただ自分の信じる神への祈りによってひとり一人を癒す姿を通して、パウロの神をも尊敬したと考えることができます。今、マルタ島にはパウロの入り江と呼ばれる場所があり、銅像が立っています。パウロへの尊敬が大きかったことをしるす一つです。これもまた、主が語られたみことばの成就でした。「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。」マル 16:17

**II. こうしてローマに到着した** 「こうして、私たちはローマに到着した。」14

続けて、こうしてローマに到着したという言葉は、神が、幾多の試練を乗り越えさせて下さり約束通りローマに導いて下さったことを示しています。神なしでは、ありえない到着であり、ゴールでした。人生は、よく旅に例えられます。旅は楽しいものですが同時に様々なハプニングが起こります。しかし、旅で体験した経験は偽りのない宝となります。パウロ一行は、ローマに到着する前に●**兄弟の歓迎を受けました** 「ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうして、私たちはローマに到着した。」14 パウロは、ローマの手前 180km のポプリオで更に 69km のアピオ・ポロでまた更に 53km のトレス・タベルネでもで兄弟達の歓迎を受けました。何とローマに着くまでに3組もの兄弟達が出迎えに来てくれたのです。パウロは、初対面兄弟に大いに励まされ、共に神への感謝を捧げ、勇気づけられました。「パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。」15 兄弟たちとの交わりは、囚人である事を忘れるほど自由で、濃密で、ゆったりとした時間が与えられ、主の御業を分かち合ったのです。そして、ローマについたパウロは、ユダヤ人の主だった人々を集めて、●**朝から晩まであかししました**。「彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。」23 パウロには、特別に自分の家を持つ事が許可されました。番兵付きでしたが囚人が家を持つというのは、異例でした。しかし、彼はその機会を生かして朝から晩まで、神の国について、イエスについて説得を試みたのです。説得は、誰でもされたくないものです。ひとり一人には自由意志があるからです。説得というのは、受け手の意志を尊重し、願う方へ導く働きかけです。パウロにはそれほどの熱い思いが溢れていました。何としてもイスラエルの望みである、キリストを知って欲しい。それこそが、彼がローマに来た理由でした。彼は、時間を忘れて語り続けました。しかし、ある人は信じある人は信じませんでした。しかし、今日私達は思えましょう。神の願いは、すべての人の救いであることを。パウロは、この後殉教しました。しかし、死に至るまで大胆に少しも妨げられることなく神の国とイエスキリストを宣べ伝え続けました。「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」30.31 私達も与えられた人生の旅をゴールまで主の守りと祈りの力を覚えながら、主イエスを宣べ伝える人生を歩ませていただきます。God bless you.